

# 教科書中心の指導実践

東京都立富士高等学校 残間紀美子



## はじめに

“語彙の習得”それは言語学習における永遠の課題といっても過言ではない。読む・書く・聞く・話すといった全ての言語活動の礎となる語彙力の習得は、言語の習得において最も時間と労力を必要とする過程であるといえる。一昨年告示された新学習指導要領においても、中学校では現行の900語程度から1,200語程度に、高等学校では現行の1,300語程度から、「コミュニケーション英語Ⅰ」で400語程度、「コミュニケーション英語Ⅱ」で700語程度、「コミュニケーション英語Ⅲ」で700語程度、総計1,800語程度まで指導する語数を拡充することとなっており、いかにして学習者に効果的に語彙を習得させていくかと

いうことは、中学校、高等学校の教員にとって大きな課題となりつつある。

## 語彙の習得

ある語彙を“習得する”とはどういう状態を指すのか。文字を見ると意味はわかるけれど音声で聞くとわからない。書けない。発音できない。単に読んで意味がわかるだけでは習得したことにはならない。Nationによれば、ある語を知っているということはその語の様々な側面（語形・意味・使用）の知識を持っていることである。具体的には、下の表（望月，2003）のようにまとめることができる。

語形	音声	受容	語がどのように聞こえるかを知っている 例) [baisik] と聞いて、実在する語だとわかる
		発表	語をどう発音すべきかを知っている 例) [baisik] と発音できる
	綴り	受容	語がどのように見えるかを知っている 例) bicycleという綴りを見て語だとわかる
		発表	語をどう綴ればよいかを知っている 例) bicycleという綴りを書ける
	語の構成要素	受容	どのような語の構成要素が見られるかを知っている 例) bi-とcycleが一緒になった語だと知っている
		発表	意味を表すのにどのような語の構成要素を使えばよいかを知っている 例) bi-とcycleを一緒にして使える
意味	語形と意味	受容	この語形はどのような意味を表すのかを知っている 例) bicycleという語形を「自転車」という意味と結びつけられる
		発表	この意味を表すのにどのような語形を使えばよいかを知っている 例) 「自転車」という意味を表すのにbicycleという語形を表出できる
	概念と指示物	受容	この概念には何が含まれるかを知っている 例) bicycleという概念には、「健康に良い」「地球に優しい」などの含意があることを知っている
		発表	この概念が指すものは何かを知っている 例) 実物・絵・写真・おもちゃの自転車を「自転車」という概念と結び付けられる
	連想	受容	この語は他のどのような語を連想させるかを知っている 例) bicycleという語が、bike, cycle, ride, mount, wheel, frame, chain, stealなどの語を連想させることを知っている
		発表	この語の代わりに他のどのような語を使えばよいかを知っている 例) bicycleの代わりに、bike, cycleを使えばよいことを知っている

使用	文法的機能	受容	この語はどのような文型で現れるかを知っている 例) bicycleという語は名詞で、文の主語、動詞の目的語や補語、前置詞の目的語として現れることを知っている
		発表	この語はどのような文型で使わねばならないかを知っている 例) bicycleという語は名詞で、文の主語、動詞の目的語や補語、前置詞の目的語として使うべきことを知っている
	コロケーション	受容	この語はどのような語と一緒に使うかを知っている 例) bicycle という語は、ride a bicycle, mount a bicycle, a racing bicycle, a missing bicycle, chain a bicycle to... のようなパターンで使われることを知っている
		発表	この語はどのような語と一緒に使わなければならないかを知っている 例) bicycle という語は、ride a bicycle, mount a bicycle, a racing bicycle, a missing bicycle, chain a bicycle to... のようなパターンで使うべきことを知っている
	使用時の使用域・頻度	受容	この語はどのような文脈でいつ、どれくらいの頻度で目や耳にするかを知っている 例) bicycleという語は、中立な (neutral) 文脈で使われ、頻度の高い語であることを知っている
		発表	その語がどのような文脈で、いつ、どれくらいの頻度で使うことができるかを知っている 例) bicycleという語は、中立な (neutral) 文脈で使うことを知っている

(『英語語彙の指導マニュアル』第2章「単語を知っているとはどういうことか」, 大修館書店より)

このように、ある語彙を知っているとは、その語彙の様々な側面の知識を持っていることであるとしているが、ここで特筆すべきは、英語母語話者であっても語の様々な側面を一様に知っているわけではないということであり、学習者同様、語彙の知識は個々の年齢やおかれた状況によって変化していくということである。英語母語話者であっても一部の側面の知識しか持たない語彙もあるということであり、指導者は、学習者の習得レベルや学習目的に合わせてどの語をどこまで教えるかという指導目標を持つ必要がある。そのためにはまず教師が教える単語について十分な知識を持たなければならないのである。

### 語彙指導とは

語彙力の重要性については誰もが認識するところであるが、日本の英語教育においては、体系的な語彙指導という概念は新しい。語彙の定着・増強はもっぱら生徒・学生自身の学習にゆだねられることが多かったようである。もちろん語彙習得に学習者の努力は不可欠であるが、その努力を効果的に導くためには教師の指導が重要となる。学習者の学習動機や能力を踏まえ、「何をどれくらい覚えるべきか」を提示するとともに、「効果的な提示」「語彙の定着」「習得語彙のアウトプット」をはかる指導が英語力の伸長に大きく影響すると考えられる。そしてその指導は、リーディングの活動においてのみならず、リスニング、ライ

ティング、スピーキングの諸活動の中でバランスよく行われることが必要である。

### 教科書を中心とした語彙指導

昔には英語入試をコーパス化し、入試出現単語の94%強をカバーできる、あるいは記憶の効率を最大限に追及した単語集など、優れた単語集、副教材が溢れている。確かに多くの語彙を効率的に覚えるには良いかもしれないが、それだけでは入試に対応できる英語の力は身につかない。語彙の定着・増強を英語の学習指導全体の中で考え、個々の指導を有機的につなげて学習者の英語力を向上させるような実践が積み重ねられなければならない。

その際、語彙の拡充のために教科書とは別の教材を使用することは生徒の負担を増すことになる。更に、教科書とは全く違うことを同時に学ぶことによって混乱をきたし、非効率的である。したがって、教科書を核にして足りない部分を補うという指導が非常に効果的であるといえる。

### 教科書掲載の語彙で入試に対応できるか

大学進学を希望する生徒が大半を占める高等学校において最も気になることは、果たして教科書に載っている語彙のみで大学入試に対応できるのだろうかということであろう。

三省堂のデータによれば、語彙的には『CROWN English Series I・II』および『CROWN English

Reading』の教科書のみでセンター試験で出題される語彙の85%（リスニングにおいては90%）の語彙をカバーすることができている。加えてWritingの教科書を使用し、更にワーク等の教材、指導書付属の例文集、評価問題集を使用することにより、十分入試に対応できる語彙力を養うことができるといえる。

実際、勤務校での3年間を通じた指導の中で、全く塾や予備校に通わず、英語の力を大きく伸ばし、進路実現をはかった生徒達の存在が教科書中心の指導の有効性を実証している。指導の中で語彙の拡充に関してはこだわった点がいくつかある。以下、具体的な実践とそのポイントを挙げてみたい。

### 教科書中心の指導実践

3年間という限られた時間の中で、本校の生徒達が英語学習に費やすことのできる時間は多くはない。部活動に学校行事、彼らにはやるべきこと、やりたいことが山積みである。それらをこなした上で受験に対応できる語彙力を身につけることが要求される。ここで述べる語彙力とは、単なる語彙知識の拡充にとどまらず、その語彙を「使える」ようにする、つまりその知識を学習者が自動化して表出し、使用できるようにしなければならないのである。限りある時間の中で、もっとも効率的な語彙テキストの提示の仕方考えたとき、教科書中心の指導が最適であると判断した。特に、英語Ⅰ、英語Ⅱ、Reading、Writingの教科書の内容を系統的に学ぶことによって、高校段階で学ぶべきテーマを網羅し、大学入試レベルのあらゆる分野に対応できる内容がバランスよく配置されているCROWNのシリーズを使用することは非常に効果的であると考えた。

#### ・語彙拡充のために教科書を最大限に活用→教科書の内容を授業で全て網羅

本校では1年次に三省堂の『CROWNⅠ』、2年次に『CROWNⅡ』と『CROWN Writing』、3年次に『CROWN Reading』と『CROWN Writing』を使用したが、その際にこだわったことは「オプショナル・リーディングも含め、全ての内容を授業中に網羅する」ということである。教科書の内

容に加えて、ワークや例文集、補充問題まで網羅することによって、教科書を中心とした授業の中でインプットの量を十分確保することを目指した。CROWNのシリーズは、数ある教科書の中でも非常に高いレベルにあり、十分な理解をはかりながら全ての内容を網羅することは生徒にとっても指導する側にとっても大変であることは確かである。特に、学校での授業が1月初旬で終了し、自宅学習期間に入ってしまう3年生のReadingにおいては、ボリュームのある教科書を網羅するのは容易ではなかった。しかしながら、時間をかければそれだけ理解が深まる結果になるわけではない。逆にスピード感を持って教科書の内容をこなしていくことから生まれるリズムと、そのリズムがもたらす抜き差しならない緊張感が、日々の授業の学習効果を高めることになる。スピードが脳を活性化させ、情報処理の速度を上げる。そして更に、緊張感によって高まる集中力が、語彙を含め、学習事項の定着に大きく作用するのである。

生徒の習熟段階によって指導方法を工夫し、内容の扱い方に軽重をつけ、また家庭学習を有効に授業計画の中に組み入れることで、教科書に出てくる語彙を余すところなく習得することを目指した。

#### ・高校1年次—英語Ⅰにおける発音指導

こと大学受験を意識する、しないにかかわらず、高校段階での英語学習指導における最終目標は「自律的な英語学習者を育む」ことである。語彙の習得についても、初期段階に自立的に語彙の増強をはかることができる力を養うことが肝要であり、その力をもとに順次学習方略を進化させ、各自の学習スタイルを確立していくことができるかどうか、その後の学習に大きな影響をおよぼす。

その意味で、高校1年生段階の入門期に発音指導は欠かせない。英単語が読めない、書けないことが最も初期の段階のつまずきとなるからである。繰り返し発音させることで英語の音やリズムに慣れ、声を出しながら英文を書くことで単語が習得しやすくなることを体得させる。

発音指導の重要性は正しい発音を身につけるだけにとどまらない。語の発音は、ワーキングメ

モリ内の音韻ループ (phonological loop) でのリハーサルによって語を習得するのに必須のものであり、語の意味を活性化するのもにも不可欠な役割を果たす。したがって発音指導においてはそれぞれの音素の発音やスペリングとの関係に留意しながらも、単語単位で十分に繰り返して身につけられるように工夫する必要がある。

また、発音記号を読めるようにする指導は、辞書指導とともに、自立的な語彙学習を促進する礎となる。特に発音記号は中学校時点で習得していない場合が多く、高校1年の早い時期に一通り網羅しておく必要があると考えている。そこで『CROWN I』に載っている発音記号のまとめを集中的に指導した。

発音記号を学ぶことによって日本人には意識しづらい微妙な発音の違いを意識することができる。何より、発音記号を意識して音読の練習を続けることによって英語の発音が非常に良くなる。入門期の発音指導が、その後の総合的な英語力の伸長に及ぼす影響は非常に大きいと考えている。発音指導を実施する際、歯磨き指導用の大きな歯形の模型を使用して発音記号とその調音の仕方を具体的に説明することになっているが、早稲田大学教授である松坂ヒロシ先生より教えていただいたこの手法が生徒達に与えるインパクトは非常に大きく、その効果は絶大である。

### ・英語での語彙定義の提示

1年次から徐々に語彙の定義を日本語訳としてではなく英英辞典の定義で提示することに慣れさせ、3年次には全ての語彙について英語での定義を与え、読み取らせる指導を実施した。英語の定義で語彙を理解することにより、その語が持つ中核的な意味をはっきりとした形で学習者に与え、理解させることができる。それによって学習者は、英語と日本語が1対1の対応をしているわけではないことを理解し、複数の訳語を持っている語の語彙情報を活性化させ、その文脈にあった意味を考えることができるようになる。この指導では、語源やイメージを与える指導とともに語彙の活性化に大きく寄与し、語彙習得に効果があると考えられる。

### おわりに

外国語の学習において学習者が最も重要と感じることは語彙の学習であるという指摘 (Hatch 1983)、さらに語彙知識のリーディングにおける重要性や、語彙力と語学能力間にある相関関係の高さを指摘する研究もなされている (Luppescu and Day 1993)。このような状況の中で、語彙に関する関心はますます高まってきており、認知や脳科学の研究、あるいはコーパスを基にした研究等、様々な側面から第2言語習得に関する新しい知見が得られ、その理論を教室での語彙学習指導へと統合する実践も多くなされている。本稿では教科書を中心とした語彙指導の実践について述べてみたが、先進的な具体的事例は望月・相澤・投野 (2003) や門田・池村 (2006) に詳しい。是非参考にされたい。

### 【参考文献】

- Nation, I.S.P.(2001), *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge University Press.  
 Hatch, E.M.(1983), *Psycholinguistics: a second language perspective*. Rowley, MA: Newbury House  
 Luppescu, S. and Day, R.R. 1993. Reading, dictionary, and vocabulary learning. *Language Learning*, 43, 263-287.  
 望月正道・相澤一美・投野由紀夫 (2003), 『英語語彙の指導マニュアル』. 大修館書店.  
 門田修平・池村大一郎 (2006), 『英語語彙指導ハンドブック』. 大修館書店

